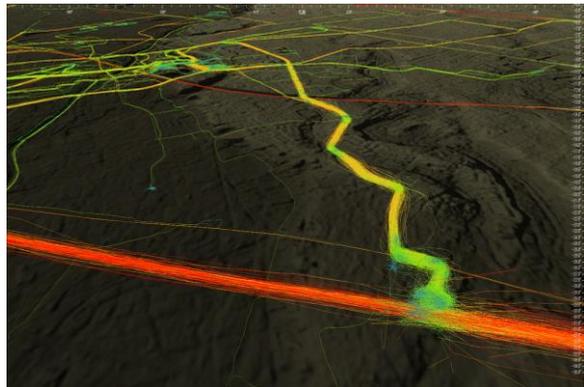


## 「移動が描く地図、移動で描く地図」

石川 初（慶應義塾大学）

ここ数年、テレビ番組や様々なガイドブックの出版などをきっかけとして、地図や地形への関心は非常に高まってきました。2011年以降の防災への意識の高まりや、Googleをはじめとするオンライン地図の普及、国土地理院による地理情報のデジタル化と無料公開など、地図や地形が注目を集めている要因や背景には様々なものがありますが、特に最近、多く見られる地図・地形への関心の高まりの特徴に、「スリパチ」や「暗渠」「境界」といったような、やや特異な施設や領域を対象としながら、地理的な要素を「楽しむ」人々が増えたことがあります。

もともと、地理学がとっつきにくかった（とっつきにくいと思われていた）理由のひとつは、地理学の扱うスケールと、私たちの日常生活のスケールとの乖離だったように思います。つまり、地図などから読み取ることができる、地理学が教える様々な事象と、私たちが私たちの身体で日常的に見聞きし感じる物事との間にギャップがあり、地図があまり切実なものに見えない、自分とは関係のないものに見えてしまうということです。この点に関して、近年の「地理趣味」の人たちの楽しみの多くが「街歩き」であること、つまり身体の「移動」を伴った楽しみであることは示唆的です。なぜなら、移動することによって私たちは地図のスケールと地上における実空間のスケールとを結びつけることができるからです。たとえば、地面の傾斜は立ち止まっているだけでは「勾配」に過ぎませんが、歩くことによって「坂道」になり、「谷」として感じられるようになります。そのように私たち自身の身体のスケールをいわば拡張してゆくことで、地図と私とのギャップが埋まって、つながって見え始めます。大きく引き伸ばして床に展示した地図や、GPS受信機で自分の移動軌跡を記録した地図、現在地を表示しながら旧版地図や主題図を入れ替えて表示できるデジタル地図などは、こうした「地図と身体とのつながり」の感覚を補助してくれるツールであり、ここに新しい地図のデザインの可能性があると思います。これが私の考えている「地理のフロンティア」のひとつです。



図版（2点とも）GPSログによる移動の地図、国土地理院5mメッシュDEM+Kashmir3D使用、石川初作成